

< 特別寄稿 >

正山征洋先生のご厚意で所蔵されている「ボタニカルアート」の一部を紹介させていただく事になりました。大変貴重で興味深く、芸術性も高い作品に加え先生自ら解説されています。

ボタニカルアート

九州大学名誉教授・長崎国際大学名誉教授

正山征洋先生

第87回

ホソバシャクヤク



ボタン科に属し、葉が細く切れ込んでいるホソバシャクヤクです。学名はPaeonia tenuifoliaで、Paeoniaはギリシャ神話の神Paeonとtenuifolia細い葉から成り立っています。ロシア南部～ヨーロッパ東南部にかけて自生している多年草で、日本へは明治期に導入されたものと思われます。ヨーロッパでは根を古くから民間療法に用いていましたが、現在では殆ど用いていないようです。

日本で広く栽培されている近縁種のシャクヤクは平安時代以前に薬用として中国から導入されたと考えられています。シャクヤクの根は痛みを取り除いたり筋肉を和らげる作用があり葛根湯や芍薬甘草湯等の漢方薬に配合される重要な生薬の一つです。

根にはモノテルペノイド配糖体であるペオニフロリン（鎮痛、鎮静、抗炎症作用、平滑筋弛緩作用、ストレス性潰瘍予防等）やその誘導体、加水分解型タンニン類（血清尿素窒素減少作用）等が含まれています。

本画はSweetにより1820年代に描かれたものです。